

われから

樋口一葉

青空文庫

わぎことば 木が言葉のいとゑを違へぬ世は來るとも、此約束は決して違へぬ、堪忍せよと謝罪してお出遊したる時の氣味のよさとは、月頃の痞へが下りて、胸のすくほと嬉しう思ひしに、又かや此頃折ふしのお宿り、水曜會のお人達や、俱樂部のお仲間
 にいたづらな御方の多ければ夫れに引かれて自づと身持の悪う成り給ふ、朱に交はればといふ事を花のお師匠が癖にして言ひ出せども本にあれば嘘ならぬ事、昔は彼のやうに口先の方ならで、今日は何處處で藝者をあげて、此様な不思議な踊を見
 て來たのと、お腹のよれるやうな可笑しき事をば眞面目に成りて仰しやりし物なれども、今日此頃のお人の悪るさ、憎くいほどお利口な事ばかりお言ひ遊して、私のやうな世間見ずをば手の平で

揉もんで丸まるめて、夫それは夫それは押おさどころ無ないお方かた、まあ今こ宵よひは何ど處どこ
 へお泊とまりにて、昨あ日はどのやうな嘘うそいふてお歸かへり遊あそばすか、夕ゆふか
 た俱く部らぶ樂でんわへ電話でんわをかけしに三じご時ころ頃かへにお歸かへりとの事こと、又また芳よし原はらの式し
 部きぶがもとへでは無なきか、彼あれも縁ゑん切きりと仰おつしやつてから最もう五ねん年ねん、
 且だん那な様さまばかり悪わるいのでは無なうて、暑しよ寒かんのお遣つかいものなど、憎に
 くらしい處しよ置ちをして見せせるに、お心こころがつかひ浮うかれて、自おのづと足あしを
 も向むけ給たまふ、本ほんに商しよ賣う人にんとて憎にくらしい物ものと次しだい第だいにおもふ事こと
 の多おほくなれば、いよゝ寝ねかねて奥おく方がたは縮ちり緬めんの抱かい卷まき打うちはふ
 りて郡ぐん内ないの蒲ふ團とんの上うへに起おき上あがり給たまひぬ。
 八でう疊ざしきの座ざ敷しきに六まい枚び屏びやう風ふうたてゝ、お枕まくらもとには桐きり胴どうの火ひ鉢ばちにお
 煎せん茶ちやの道だう具ぐ、烟たば草こ盆ぼんは紫したん檀たんにて朱し羅ゆらう宇うの烟き管せるそのさま可を笑かし

く、枕まくらぶとんの派手はでもやう摸様まもようより枕まくらの總ふさくれなの紅つねひも常このの好おほかたみの大方おほかたに
 顯あらはれて、蘭らんじや奢やにむせぶ部へやの内うち、燈籠あんどうだい臺ひかりの光ひかりかすかなり。
 奥おく方がたは火鉢ひばちを引寄ひきよせて、火ひの氣けのありやと試こころみるに、宵よひに小間こま
 使づかひが埋いけ參まいらせたる、櫻炭さくらなの半なかは灰はひに成なりて、よくも起おこさで埋い
 けつるは黒くろきまゝにて冷ひえしもあり、烟管きせるを取上とりあげて一二服ふく、烟けふ
 りを吹ふいて耳みみを立たつれば折をりから此室ここのの軒のきばに移うつりて妻戀つまごひありく
 猫ねこの聲こゑ、あれは玉たまでは有あるまいか、まあ此霜夜このしもよに屋根傳やねづたひ、何い
 日つかのやうな風かぜひきに成なりて苦くるしさうな咽のどをするので有あらう、あ
 れも矢やつ張はりいたづら者と烟管きせるを置おいて立たちあがる、女猫めねこよびにと雪ほ
 灯んぼりに火ひを移うつし平常着ふだんぎの八丈ちやうの書生しよせい羽織いばをりしどけなく引ひきかけて、
 腰こし引ひきゆへる縮緬ちりめんの、淺黄あさぎはことに美うつくしく見みえぬ。

踏むに冷めたき板の間を引裾ながく縁がはに出で、用心口
 より顔さし出し、玉よ、玉よ、と二夕聲ばかり呼んで、戀に狂ひ
 てあくがる、身は主人が聲も聞分けぬ。身にしむやうな媚めか
 しい聲に大屋根の方へと啼いて行く。ゑ、言ふ事を聞かぬ我ま、
 者め、何うともお爲と捨てぜりふ言ひて心ともなく庭を見るに、
 ぬば玉の闇たちおほふて、物の黒白も見え分かぬに、山茶花の
 咲く垣根をもらて、書生部屋の戸の隙より僅かに光りのほのめく
 は、お、まだ千葉は寝ぬさうな。
 用心口を鎖してお寢間へ戻り給ひしが再度立つてお菓子戸棚
 のびすけつとの瓶とり出し、お鼻紙の上へ明けて押ひねり、雪
 灯を片手に縁へ出れば天井の鼠がたくと荒れて、鼯にても

入りしかきゝといふ聲もの凄し。しるべの燈火かげゆれて、廊
 下の闇に恐ろしきを馴れし我家の何とも思はず、侍女下婢が夢
 の最中に奥さま書生の部屋へとおはしぬ。
 お前はまだ寐ないのかえ、と障子の外から聲をかけて、奥さま
 ずっと入り玉へば、室内なる男は讀書の腦を驚かされて、思ひ
 かけぬやうな惘れ顔をかしう、奥さま笑ふて立ち玉へり。

一一

机は有りふれの白木作りしらぎづくに白天竺しろてんぢくをかけて、勸工場くわんこうばもの、
 筆立てふでたに晋唐しんとう小楷しょうかいの、栗鼠毛りつそもうの、ペンも洋刀ないふも一ツに入れ

て、首くびの缺かけた龜かめの子この水みづ入れいに、赤あか墨いんき汁じの瓶びんがおし並ならび、齒は

 みかきの箱はこ我われもと威ゐを張はりて、割かつ據つきの机つくの上うへに寄よりかゝつて、

 今いままで洋よう書しよを繙ひもて居ゐたは年とし頃ごろ二十は歳たちあまり三なとは成なるまじ、

 丸まる頭あたまの五ぶ分がり刻かりにて顔かほも長ながからず角かくならず、眉まゆ毛げは濃こくて目めは

 黒くろ目めがちに、一たい體たいの容きり顔よう好い方ほうなれども、いかにもいかにもの

 田いな舍なか風ふう、午ご房ぼう縞しまの綿わた入いれに論ろんなく白しろ木も綿めんの帶おび、青あき毛を布けつを

 膝ひざの下したに、前まへこづみに成なりて兩り手やうに頭かしらをしかと押おへし。

 奥おくさまは無む言ごんにびすけつとを机つくの上うへへ乗のせて、お前まへ夜よふかしをす

 るなら爲するやうにして寒さむさの凌しのぎをして置おいたら宜よからうに、湯ゆ

 わかしは水みづに成なつて、お火ひといつたら螢ほ火たるのやうな、よく是これで

 寒さむく無ないのう、お節せつ介かいなれど私わがおこして遣やりませう、炭すみ取とり

を此處へと仰しやるに、書生はおそれ入りて、何時も無精を致
 しまする、申譯の無い事と有難いを迷惑らしう、炭
 取をさし出して我れは中皿へ桃を盛つた姿、これは私が蕩樂
 さと奥さま炭つきにかゝられぬ。
 自慢も交じる親切に螢火大事さうに挟み上げて、積み立てし
 炭の上へのせ、四邊の新聞みつ四つに折りて、隅の方よりそよ
 くと煽ぐに、いつしか是れより彼れに移りて、ぱちぱちと言ふ
 音いさましく、青き火ひらくと燃へて火鉢の縁のやゝ熱うなれ
 ば、奥さまは何のやうな働きをでも遊したかのやうに、千葉もお
 翳りと少し押やりて、今宵は分けて寒い物をと、指輪のかゝやく
 白き指先を、籐編みの火鉢の縁にぞ懸けたる。

書生の千葉いとゞしう恐れ入りて、これは何うも、これはと頭
 を下げるばかり、故郷に有りし時、姉なる人が母に代りて可愛
 がりて呉れたりし、其折其頃の有さまを思ひ起して、もとよ
 り奥様が派手作りはでつくに田舎ものいななか、姉者人がいさゝか似たるよし
 は無けれど、中學校ちうがくかうの試験しけん前に夜明しをつゞけし頃、此やうな
 事を言ふて、此やうな處作しよさをして、其上そのうへには蕎麥搔そばがきの御馳走ごちそう
 あたゝまるやうにと言ふて呉れし時ときも有し、懐かしきは其昔そのむかし、
 有ありがた難なきは今の奥おく様が情なさけと、平常へいぜいお世話せわに成りぬる事ことさへ取
 添りそへて、怒り肩いかかたもすぼまるばかり畏まりて有るさまを、奥おくさま寒さむ
 さうなと御覽ごらんじて、お前羽織まへはをりはまだ出來ぬかえ、仲なかに頼たのんで大おほい
 急そぎに仕立したて、貫もらふやうにお爲し、此寒このさむい夜よに綿入わたいれ一つで辛棒しんぼう

のなる筈は無ない、風かぜでも引ひいたら何どうお爲しだ、本ほん當とうに身からだ體たいを
 厭いとはねばいけませぬぞえ、此このまへ前まへに居ゐた原はら田だといふ勉べん強きようもの
 が矢やつ張はりお前まへの通とほり明あけても暮くれても紙し魚みのやうで、遊あそびにも行ゆ
 かなければ、寄よ席せ一つ聞きかうでもなしに、それはそれは感かん心しんと
 言いはふか恐おそろしいほどで、特とく別べつ認にん可かの卒そつ業げうと言いふ間ま際ぎはまで疵きず
 なしに行いつてのけたを、惜をしい事ことにお前まへ、腦のう病びやうに成なつたでは
 無なからうか、國くに元もとから母ははさんと呼よんで此こゝ處ゝの家いえで二つ月きも介かい抱ほう
 をさせたのだけれど、終つひには何なにが何なにやら無む我が無む中ちゆうになつて、思おも
 ひ出だしても情なさけない、言いはゞ狂きやう死しをしたのだね、私わたしは夫それを見みて
 居ゐた故ゆゑ、勉べん強きよう家は氣きか引ひける、懶なま怠けられては困こまるけれど、煩わづらは
 ぬやうに心こゝろがけてお呉くれ、別わけてお前まへは一つ粒つぶ物もの、親おやなし、兄きやうだ

弟なしと言ふでは無いか、千葉家を負ふて立つ大黒柱に異
 状が有つては立直しが出来ぬ、さうでは無いかと奥様身に
 比べて言へば、はッ、はッ、と答へて詞は無かりき。

奥様は立上がつて、私は大層邪魔をしました、夫ならば成る
 べく早く休むやうにお爲、私は行つて寝るばかりの身體、部やへ
 行く間の事は寒いとても仔細はなきに、構ひませぬから此れを着
 てお出、遠慮をされると憎く、成るほどに何事も黙つて年
 上の言ふ事は聞く物と奥様すつとお羽織をぬぎて、千葉の背
 後より打着せ給ふに、人肌のぬくみ背に氣味わるく、麝香の
 かをり満身を襲ひて、お禮も何といひかぬるを、よう似合のう
 と笑ひながら、雪灯手にして立出給へば、蠟燭いつか三分

の一ほどに成りて、
軒端に高し木がらしの風。

三

落ちば けふりすゑ
落葉たくなる烟の末か、夫れかあらぬか冬がれの庭木立をかす
めて、裏通りの町屋の方へ朝毎に靡くを、夫れ金村の奥
様がお目覺だと人わる口の一つに數へれども、習慣の恐ろし
きは朝飯前の一風呂、これの濟までは箸も取られず、一日怠る
事のあれば終日氣持の唯ならず、物足らぬやうに氣に成るとい
ふも、聞く人の耳には洒落者の蕩樂と取られぬべき事、其身
に成りては誠に詮なき癖をつけて、今更難義と思ふ時もあれど、

めしつか 召使ひの人々、心を^え得て御命令なきに眞柴折くべ、お加^かげん
 が宜^{よろ}しう御座^{ござ}りますと朝^{あさ}床^{どこ}のもとへ告^つげて來れば、最^もう廢^よしま
 せうと幾^{いく}度^{たび}か思^{おも}ひつゝ、猶^{なほ}相^{あひ}かはらぬ贅^{ぜい}澤^{たく}の一つ、さなご入
 れたる糠^{ぬか}袋^{ぶくろ}にみがき上^あげて出^いづれば更^{さら}に濃^こい化粧^{げし}の白^{しろ}ぎく、是
 れも今^{いま}更^まやめられぬやうな肌^ぞになりぬ。
 とし 年を言^いはゞ二十六、遅^{おく}れ咲^ざき花^{はな}も梢^{こづえ}にしほむ頃^{ころ}なれど、扮^お装^{つく}り
 よきと天^{てん}然^{ねん}の美^うくしきと二^あつ合^あせて五^わつほどは若^{わか}う見^みられぬる
 とく、せう 徳^{とく}の性^{せう}、お子^こ様^{さま}なき故^{ゆゑ}と髮^{かみ}結^{ゆひ}の留^{とめ}は言^いひしが、あらばいさゝか
 おちつ 沈^お着^ちくべし、いまだに娘^{むすめ}の心^{こゝろ}が失^うせで、金^{きん}齒^{ばい}入^いれたる口^{くち}元^{もと}に何^ど
 う爲^せい、彼^かう爲^せい、子^し細^{さい}らしく數^あ多^{また}の奴^ひ婢^とをも使^{つか}へども、旦^だ那^{んな}さ
 ま進^すめて十^{けん}軒^{たな}店^{たな}に人^{にん}形^{ぎやう}を^か買^かひに^ゆ行^ゆくなど、一^か家^かの妻^{つま}のやうに

は無く、お高僧頭巾に肩掛引まとひ、良人の君もろ共川崎の
 大師に参詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、
 何處のぞ有らうと呷かれて、奥様とも言はれぬる身ながら是れ
 を淺からず嬉しうて、いつしか好みも其様に、一つは容貌の
 させし業なり。
 目鼻だちより髪のかゝり、齒ならびの宜い所まで似たとは愚か母
 様を其まゝの生れつき、奥様の父御といひしは赤鬼の與四
 郎とて、十年の以前までは物すごい目を光らせて在したる物なれ
 ど、人の生血をしぼりたる報ひか、五十にも足らで急病の腦
 充血、一朝に此世の税を納めて、よしや葬儀の造花、派手
 に美事な造りはするとも、辻に立つて見る人に爪はぢきをされて

後生ごせういかゞと思はるゝ様成やまなりし。

此このひと人始めはじめは大藏省おほくらしやうに月俸八圓頂げつぽう ちやうだい戴だいして、元はげちよろけ

の洋服ようふくに毛繻子けじゆすの洋傘かうもりさしかざし、大雨たいうの折をりにも車くるまの贅ぜいはや

られぬ身成みなりしを、一念ねんぼつぎ發起はつしして帽子ぼうしも靴くつも取とつて捨すて、今川橋いまがはばし

の際きはに夜明よあかしの蕎麥搔そばがきを賣うり初せめし頃ころの勢いきほひは千鈞きんの重おもきを提ひつさげ

て大海たいかいをも跳おどり越こえつべく、知しる限かぎりの人舌ひとしたを卷まいて驚おどろくもあ

れば、猪武者いのしゝむしやの向むかふ見みず、やがて元もとも子こも摺すつて情なさけなき様やう子す

が思おもはるゝと後しりうごつ言ありも有ありけらし、須彌しゆみも出いでたつ足あしもとの、其そのは

當時じめの事こと少すこしいはゞや、茨いばらにつらぬく露つゆの玉たまこの與よ四郎しやうにも戀こひ

は有ありけり、幼馴染おきななじみの妻つまに美尾みをといふ身みがらに合あはせて高品かうひんに美うつ

くしき其そのとし十七ななばかり成なりしを天てんにも地ちにも二ふたつなき物ものと捧さげ持も

ちて、役處がへりの竹の皮、人にはしたゝれるほど濕つぽき姿
うしるゆびと後指さゝれながら、妻や待らん夕鳥の聲に二人とり膳
さいものの菜の物を買ふて來るやら、朝の出がけに水瓶の底を掃除して、
てをけ一日手桶を持たせぬほどの汲込み、貴郎お晝だきで御座いますと
い言へば、おいと答へて米かし桶に量り出すほどの惚ろさ、斯くて
おは終らば千歳も美しくしき夢の中に過ぬべうぞ見えし。
あひそさるほどに相添ひてより五年目の春、梅咲く頃のそゞろあるき、
どえうび土曜日の午後より同僚二三人打つれ立ちて、葛飾わたりの
うめやしきまわ梅屋敷廻り歸りは廣小路あたりの小料理やに、酒も深くは
のまたち呑ぬ質なれば、淡泊と仕舞ふて殊更に土産の折を調へさせ、
とも友には冷評の言葉を聞きながら、一人別れてとぼくと本

郷う附つけ木店ぎだの我家わがやへ戻るもどに、格子戸こうしどには締りしまもなくして、上うへ
 あがるに燈とも火しびはもとよりの事こと、火鉢ひばちの火ひは黒くろく成なりて灰はいの外そとに
 轉ころく々と凄すさまじく、まだ如月きさらぎの小夜嵐さよあらし引ひまどの明あけ放ばしより
 入いりて身みに染しむ事ことも堪たえがたし、いかなる故ゆゑとも思おもはれぬに洋燈らんぷ
 を取とり出いしてつく／＼と思案しあんに暮くるれば、物音ものおとを聞きつけて壁か
 隣べどの小學せうがく教員けいゐんの妻つま、いそがはしく表おもてより廻まわり來きて、お歸かへ
 りに成なりましたか、御新造ごしんぞは先刻さきほど、三時過じすぎでも御座ござりましたろ
 か、お實家さとからのお迎むかひとて奇麗きれいな車くるまが見みえましたに、留る守すは何な
 分ぶんたのむと仰おつしやつて其そのまゝお出でかけに成なりました、お火ひが無なく
 ば取とりにお出いでなされ、お湯ゆも沸わいて居いますからと忠實まめ／＼しう
 世話せわを焼やかるゝにも、不審ふしんの雲くもは胸むねの内うちにふさがりて、何どういふ

やうすど
 様子何のやうな事をいふて行きましかとも問ひたけれど悒氣
とこ 男と忖度らるゝも口惜しく、夫れは種々御厄介で御座りま
わたしもど した、私が戻りましたからは御心配なくお就蓐下されと洒然
となりつまかへ といひて隣の妻を歸しやり、一人淋しく洋燈の光りに烟草を吸ひ
いまく て、忌々しき土産の折は鼠も喰べよとこぐ繩のまゝ勝手元に
なげいだ 投出し、其夜は床に入りしかども、さりとは肝癩のやる瀬
 なく、よしや如何なる用事ありとても、我れなき留守に無斷の外
わいしつ わいしつ、殊更家内あけ放しにして、是れが人の妻の仕業かと思
あま ふに餘りの事と胸は沸くやうに成りぬ。明くれは日曜、終日
ねい 寝て居ても咎むる人は無し、枕を相手に芋虫を眞似びて、表の
こうし 格子には錠をおろしたまゝ、人訪へとも音もせず、いたづらに午

後四時といふ頃に成ぬれば、車の門に止まりて優しき駒下駄の音の聞ゆるを、論なく夫れとは知れども知らぬ顔に虚寝を作れば、美尾は格子を押し見て、これは如何な事、錠がおりてあると獨り言をいつて、隣家の松の垣根に添ひて、水口の方へと間道を入りぬ。

昨日の午後より谷中の母さんが急病、癩氣で御座んすさうな、つよく胸先へさし込みまして、一時はとても此世の物では有るまいと言ふたれど、お医者さまの皮下注射やら何やらにて、何事も無く納りのつき、今日は一人でお厠にも行かれるやうに成ました、右の譯故の手間どり、昨日家を出ます時も、氣がわくくして何事も思はれず、後にて思へば締りも付けず、庭

はぐち 口も明け放して、嘸かし貴郎のお怒り遊した事と氣が氣では無
 かつたなれど、病 人 見捨て、歸る事もならず、今日も此やう
 に遅くまで居りまして、何處までも私が悪う御座んするほどに、
 このとほ 此 通り謝罪ますほどに、何うぞ御免し遊して、いつもの様に打
 ちと 解けた顔を見せて下され、御嫌機直して下されと詫ぶるに、さて
 は左様かと少し我が折れて、夫れならば其様に、何故はがきで
 も越しはせぬ、馬鹿の奴がと叱りつけて、母親は無病壯健
 ひと の人とはばかり思ふて居たが、癩といふは始めてかと睦しう談り合
 ひて、與四郎は何事の秘密ありとも知らざりき。

浮世うきよに鏡かざみといふ物のなくば、我が妍かほよきも醜みにくきも知らしで、分ぶんに安やすんじ
 たる思おもひ、九尺二間しやくけんに楊貴妃ようきひこまち小町こまちを隠かくして、美色びしよくの前まへだれ掛かけ
 奥床おくゆかしうて過ぎぬべし、萬よろづに淡々あわくしき女子心おなごこころを來きて搖ゆする
 様やうな人の賞ほめ詞ことばに、思おもはず赫くわつと上氣じやうきして、昨日きのふまでは打うちすてし
 髪かみの毛けつやらしう結むすびあげ、端折はしおりつゞみ取とり上げて見みれば、いか
 う眉毛まゆげも生はえつゞきぬ、隣となりより剃かみそり刀かたなをかりて顔かほをこしらゆる心こころ
 そもく見みて呉くれの浮氣うわきに成なりて、襦袢じゆばんの袖そでも欲ほしう、半天はんてん
 の襟ゑりの觀くわん光くわうが糸いとばかりに成なりしを淋さびしがる思おもひ、與よ四郎しやうが妻つまの
 美尾みをとても一つは世間せけんの持もち上あげしなり、身み分ぶんは高たかからずとも誠まことあ
 る良人おつとの情なさけ心こころうれしく、六疊でう、四疊二間でうまの家いへを、金殿きんでんとも

玉樓ぎよくろうとも心得こころえて、いつぞや四丁目てうめの薬師様やくしさまにて買かふて貰もらひし洋銀ようぎんの指輪ゆびわを大事だいじらう白魚しらをのやうな、指ゆびにはめ、馬爪ばづのさし櫛くしも世よにある人ひとの本甲ほんかうほどには嬉うれしがりし物ものなれども、見みる人ひとごと毎まに賞ほめそやして、これほどの容貌きりようを埋うもれ木ぎとは可あた惜ちしいもの、出でて居いる人ひとで有あらうなら恐おそらく島原しまばら切きつての美人びじん、比くらべ物はあるまいとて口くちに税ぜいが出でねば我わがおもしろに人ひとの女房にようぼを評ひようしたてる白痴こけもあり、豆腐おかべかふとて岡持おかもちさげて表おもてへ出いれば、通とほりすがりの若い輩わかひとに振ふりかへられて、惜をしい女をんなに服粧みなりが悪わいなど咲ど然つと笑わはれる、思おもへば綿銘仙めんめいせんの糸いとの寄よりしに色いろの腿さめたる紫むらさめりんすの幅狭はせまき帯おび、八圓えんどりの等とうぐわい外つまが妻つまとしては是これより以いじやうよそほ上じやうに粧よそほはるべきならねども、若わかき心こころには情なさけなく※のゆるびし岡を

持もちに豆腐おかべの露つゆのしたゝるよりも不覺そごろに袖そでをやしほりけん、兎角とかく
こころに心のゆらくと襟袖えりそでぐち口くちのみ見みらるゝをかて、加くわへて此このまへ前の
とし年はるさめ、春雨はるさめはれての後のち一日いちにち、今日けふならではの花はな盛さかりに、上野うへを
 はじめ墨田川すみだがはへかけて夫婦ふうふづれを樂たのしみ、隨ずいぶん分ぶんとも有ある限かぎり
ていさいの体裁ていさいをつくりて、取とつて置おきの一いつてう羅らも良おつと人は黒くろ細ろつむぎの
もん紋もんつき羽織ばをり、女房にようぼうたゞは唯一筋すぢの博多はかたの帶おびしめて、昨日きのふあま甘かへて買かふて
もら貰もらひし黒くろぬりの駒下駄こまげた、よしや疊たゝみは擬まがひ南部なんぶにもせよ、比くらぶる物もの
ときなき時ときは嬉うれしくて立たち出いでぬ、さても東叡山とうえいざんの春はる四月ぐわつ、雲みまがに見み紛まが
こふ木この間の花はなも今日けふ明日あすばかりの十七日な成なりければ、廣小路ひろこうぢよ
ながり眺ながむるに、石段いしだんを下おり昇のぼる人ひとのさま、さながら蟻ありの塔とうを築つき
た立つるが如ごとく、木この間の花はなに衣類きものの綺羅きらをきそひて、心こころなく見みる

目には保養この上も無き景色なりき、二人は櫻が岡に昇りて今の
 櫻雲臺が傍近く來し時、向ふより五六輛の車かけ聲いさまし
 くして來るを、諸人立止まりてあれくと言ふ、見れば何處の
 華族様なるべき、若き老ひたる扱き交ぜに、派手なるは曙の振
 袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間松の色、いつ見
 ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物、今様ならば襟の間に
 金ぐさりのちらつくべきなりし、車は八百膳に止まりて人は奥
 深く居るを、憎くさげな評いふて見送るもあり、唯大方にお
 立派なといひて行過ぐるも有しが、美尾はいかに感じてか、茫
 然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しき様に物おもはしげに
 て、何れ華族であらうお化粧が濃厚だと與四郎の振かへりて

言ふを耳にも入れぬらしき様にて、我れと我が身を打ながめ唯悄悄
 よんぼり
 然としてあるに與四郎心ならず、何うかしたかと氣遣ひて問
 へば、俄に氣分が勝れませぬ、私は向島へ行くのは廢めて、
 此處から直ぐに歸りたいと思ひます、貴郎はゆるりと御覽なりま
 せ、お先へ車で歸りますと力なさうに凋れて言へは、夫れはと
 よしらうあん 與四郎案じ始めて、一人では何も面白くは無い、又來るとして
 けふや 今日は 廢めにせうと美尾がいふまゝ優しう同意して呉れる嬉しさ
 も、此折何とも思はれず、切めて歸りは鳥でも喰べてと機嫌を
 このおりなにおも
 取られるほど物がなしく、逃げ出すやうにして一散に家路を急げ
 ば、興ことくく盡きて與四郎は唯お美尾が身の病氣に胸をい
 たためぬ。

はかなき夢に心の狂ひてより、お美尾は有し我れにもあらず、人
とめな目無ければ涙に袖をおし浸し、誰れを戀ふると無けれども大空
もの おもに物の思はれて、勿体なき事とは知りながら與四郎への待遇
にきのふには似ず、うるさき時は生返事して、男の怒れば我れも
はら腹たゝしく、お氣に入らぬ物なら離縁して下され、無理にも置い
たのてはと頼みませぬ、私にも生れた家が御座んするとて威丈高に
をとこ ころなるに男も堪えず箒を振廻して、さあ出て行けと時の拍子危
さすがふくなれば、流石に女氣の悲しき事胸に迫りて、貴郎は私をい
だぢめ出さうと爲さるので御座んすか、私が身はそもくから貴郎
あに上げた物なれば、憎く、ば打つて下され、殺して下され、此處
しを死に場に來た私なれば、殺されても此處は退きませぬ、さあ何
ば

となりして下されと泣いて、袖に取すがりて身を悶ゆるに、もとより憎くは有らぬ妻の事、離別などは時の威嚇のみなれば、縛りて泣くを好い時機に、我まゝ者奴の言ひじらけ、心安きまゝの駄々と免して可愛さは猶日頃増るべし。

五

與四郎が方に變る心なければ、一日も百年も同じ日を送れども其頃より美尾が様子の兎に角に怪しく、ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審しさ。與四郎心をつけて物事を見るに、さながら戀に心をうばゝれて空虚に成し人の如く、お美尾お美尾と呼

べば何えと答ゆる詞の力なき、何うでも日々を義務ばかりに送り
 て身は此處に心は何處の空を 氣にかゝる事ども、我が女房を人
 に取られて知らぬは良人の鼻の下と指さゝれんも口惜しく、いよ
 く眞に其事あらばと恐ろしき思案をさへ定めて美尾が影身と
 つき添ふ如く守りぬ。
 されども是れぞの跡もなく、唯うかゝと物おもふらしく或時
 はしみ／＼と泣いて、お前様いつまで是れだけの月給取つ
 てお出遊ばすお心ぞ、お向ふ邸の旦那さまは、其昔し大部屋
 あるきのお人成しを一念ばかりにて彼の御出世、馬車に乗つて
 のお姿は何のやうの髭武者だとして立派らしい見えるでは御座ん
 せぬか、お前様も男なりや、少しも早く此様な古洋服にお

辨當べんたうさげことる事をやめて、道みちを行ゆくに人の振ひとりかへるほど立派りつぱのお
 人ひとに成なつて下くだされ、私わたしに竹たけの皮かはづゝみ持もつて來きて下くださる眞實しんじつが
 有あらば、お役處やくしよがへりに夜學やがくなり何なんなりして、何どうぞ世間せけんの人ひと
 に負まけぬやうに、一ツばしの豪ゑらい方かたに成なつて下くだされ、後生ごせうで御座ござ
 んす、私わたしは其その爲ためになら内職ないしよくなりともして御菜おさいの物もののお手傳てつだ
 ひはしましよ、何どうぞ勉強べんきやうして下くだされ、拜おがみますと心こころから泣ないて、
 この此このある甲斐かひなき活計くわくしを數かぞへれば、與よ四郎しろうは我わが身みを罵ののし事ことと
 腹はらたゝしく、お爲ためごかしの夜學やがく沙汰さたは、我われを留る守すにして身みの樂たの
 しみを思おもふ故ゆゑぞと一圖づにくやしく、何どうで我おれは此このやうな活地いくちな
 し、馬車ばしやは思おもひも寄よらぬ事こと、此後このご辻つちぐるま
 ければ、今いまのうち身みの納おさまりを考かんがへて、利口りこうで物ものの出來できる、學がく者しや

で好^{いろをとこ}男子^とで、年^{とし}の若^{わか}いに乗^{のり}かへるが随^{ずゐ}一^{いち}であらう、向^{むか}ふの主^{しゅじ}
 人もお前^{まへ}の姿^{すがた}を褒^ほめて居^ゐるさうに聞^きいたぞと、録^{ろく}でもなき根^ねす
 り言^{ごと}、懶^{なまけもの}怠^{なまけもの}者^{もの}だ、我^おれは懶^{なまけもの}怠^{なまけもの}者^{もの}の活^{いくぢ}地^ぢなしだど大^{だい}
 の字^じに寐^ねそべつて、夜^や學^{がく}はもとよりの事^{こと}明日^{あした}は勤^{つと}めに出^でるさへ憂^う
 がりて、一^{すん}寸^{すん}もお美^み尾^をの傍^{そば}を放^{はな}れじとするに、あゝお前^{まへ}様^{さま}は何^な
 故^ぜその様^{やう}に聞^き分^わけては下^{くだ}さらぬぞと淺^{あさ}ましく、互^{たが}ひの思^{おも}ひそはそ
 はに成^なりて、物^{もの}言^いへば頓^{やが}て争^あひの糸^{いと}口^{くち}を引^ひ出^{いだ}し、泣^ないて恨^{うら}ん
 で摺^すれくの中^{なか}に、さりとも憎^{にく}くからぬ夫^め婦^{をと}は折^{おり}ふしの仕^しこなし
 わす^{わす}れがたく、貴^{あなた}郎^か斯^かうなされ、彼^ああなされと言^いへば、お美^み尾^をお美^み
 尾^をと目^めの中^{なか}へも入^いれたき思^{おも}ひ、近^{きん}處^{じよ}合^が壁^がつゝき合^あひて物^{もの}
 争^そひに口^{くち}を利^きく者^{もの}は無^なかりし。

ありし梅見うめみの留守るすのほど、實家じつかの迎むかひとて金紋きんもんの車くるまの來きし頃ころよ
 りの事こと、お美尾みをは兎角とかくに物ものおもひ靜しづまりて、深ふかくは良人おつとを諫いさめも
 せず、うつくと日ひを送おくつて實家じつかへの足あしいとゞしう近ちかく、歸かへれば
 襟えりに腮あごを埋うづめてしのびやかに吐息といきをつく、良人おつとの不審ふしんを立たつれば、
 何どうも心こゝ悪あるう御座ござんすからとて食しよくもようは喰たべられず、晝寢ひるねがち
 に氣き不精ふせうに成なりて、次第しだいに顔かほの色いろの青あほきを、一向むきに病氣びやうきとばか
 り思おもひぬれば、與よし四郎らうかぎ限りもなく傷いたましくて、醫者いしやにかゝれの、
 藥くすりのを吞のめのと悋氣りんきは忘わすれて此このこと事ことに心こゝろを盡つくしぬ。
 されどもお美尾みをが病氣びやうきはお目出度めでたきかた成なりき、三四月がつの頃ころより夫それ
 とは定さだかに成なりて、いつしか梅うめの實落みおつる五月雨さみだれの頃ころにも成なれば、
 となりきんじよひとくの隣な近處ひとくの人々ひとよりおめで度たう御座ござりますと明あきらかに言いはれて、

をりすこあつ折から少し暑くるしくとも半天のぬがれぬ恥かしき、與四郎は
 めづ珍らしく嬉しきを、夢かとばかり辿られて、此十月が當る月とあ
 るを、人には言はれねども指をる思ひ、男にてもあれかしと敢果
 なき事を占なひて、表面は無情つくれども、子安のお守り何く
 れと、人より聞きて來た事を其まゝ、不案内の男の身なれば間
 違ひだらけ取添へて、美尾が母に萬端を頼めば、お前さんより
 私の方が少し功者さ、と參られて、成るほど成るほどと口を噤
 みぬ。

六

げつきう 月給の八圓はまだ昇給の沙汰も無し、此上小兒が生れ
 て物入りが嵩んで、人手が入るやうに成つたら、お前がたが何と
 する、美尾は虚弱の身體なり、良人を助けて手内職といふ
 も六ツかしかるべく、三人居縮んで乞食のやうな活計をするも、
 餘り賞めた事では無し、何なりと口を見つけて、今の内から心が
 け最う少しお金になる職業に取かへずば、行々お前がたの
 身の振かたは無く、第一子を育つる事もなるまじ、美尾は私が一
 人娘、やるからには私が終りも見つて貰ひたく、贅澤を言ふの
 では無けれど、お寺参りの小遣ひ位、出しても貰はう、上げま
 せうの約束でよこしたのなれども、元來くれられぬは横
 着ならで、何うでも爲る事のならぬ活地の無き故、夫れは思ひ

絶つて私は私の口を濡らすだけに、このとし此年をして人様の口入れ
 やら手傳ひやら、老おひはぢ耻ながらも詮せんの無なき世よを經へまする、左されど
 も當あて無なしに苦勞くろうは出來ぬもの、つく／＼お前夫婦まへふうふの働はたらきを見
 るに、私わたしの手足てあしが働はたらかぬ時ときに成なりて何なに分ぶんのお世話せはをお頼たのみ申まをさ
 ねば成ならぬ曉あかつき、月給げつきう八圓えんで何どう成ならう、夫それを思おもふと今いまのうち
かくご覺悟きを極すこめて、少すこしは互たがひに愁つらき事ことなりとも當たうぶん分ふう夫婦ふう別わかれし
 て、美尾みをは子こぐるめ私わたしの手てに預あづかり、お前まへさんは獨ひとり身みに成なりて、
くわんあん官かぎ員さまのみに限かぎらず、草鞋わらじを履はいてなりとも一廉かどの働はたらき
 をして、人ひと並なみの世よの過すごされる様やうに心こころかけたが宜よからうでは無な
 いか、美尾みをは私わたしが娘むすめなれば私わたしの思おもふやうに成ならぬ事ことは有あるまじ、
なに何もお前まへさんの思案しあん一つと母親は、おやお美尾みをの産前さんまへよりかけて、萬よろ

づの世話にと此家へ入り込みつゝ、兎もすれば與四郎を責めるに、
 齒ぎしりするほど腹立しく、此老婆はり仆すに事は無けれど、
 唯ならぬ身の美尾が心痛、引いては子にまで及ぼすべき大事と
 胸をさすりて、私とても男子の端で御座りますれば、女房子位
 過ぐされぬ事も御座りますまいし、一生は長う御座ります。墓へ
 這入るまで八圓の月給では有るまいと思ひますに、其邊格
 別の御心配なくと見事に言へば、母親はまだらに残る黒き
 齒を出して、成るほどく宜く立派に聞えました、左様いふて呉
 れねば嬉しう無い、流石は男一疋、その位の考は持つて居て呉れ
 るであらう、成るほど成るほどと面白くも無い黙頭やうを爲
 る憎くさ、美尾は母さん其やうな事は言ふて下さりませ、家の

ひときげん
 人の機嫌そこなうても困りますと迂路くするに、與四郎は心お
 ぐりて、馬鹿婆めが、何のやうに引割かうとすればとて、美尾は
 わもの、親の指圖なればとて別れる様な薄情にて有るべきや、
 殊更今より可愛き物さへ出来んに二人が中は萬々歳、天の原ふ
 みとゞろかし鳴神かと高々と止まれば、母を眼下に視下し
 て、放れぬ物に我れ一人さだめぬ。
 がつなか
 十月中の五日、與四郎が退、出間近に安らかに女の子生れぬ、
 おとこねが
 男と願ひし夫れには違へども、可愛さは何處に變りのあるべき、
 やれお歸りかと母親出むかふて、流石に初孫の嬉しきは、頬
 のあたりの皺にもしるく、これ見て下され、何と好い子では無い
 か、此まあ赤い事と指つけられて、今更ながらまごとくと嬉し

く、手をさし出すもいさゝか恥かしければ、母親に抱かせたる
 まゝさし覗いて見るに、誰れに似たるか彼れに似しか、其差別
 も思ひ分ねども、何とは知らず怪しう可愛くて、其啼く聲は昨日
 まで隣の家に聞きたるのと同じ物には思はれず、さしも危ふく思
 ひし事の左りとは事なしに終りしかと重荷の下りたるやうにも覺
 ゆれば、産婦の様子いかにやと覗いて見るに、高枕にかゝり
 て鉢巻にみだれ髪がみすがたの姿、傷ましきまで疲れたれど其美くしさ
 は神々かみくしき様に成りぬ。

七夜の、枕直しの、宮参りの、唯あわたゞしうて過ぎぬ、
 子の名は紙へ書きつけて産土神の前に神鬮みくじのやうにして引けば、常
 盤きはのまつ、たけ、蓬菜ほうらいの、つる、かめ、夫れ等は探ぐりも當て

ずして、與四郎が假の筆ずさびに、此様な名も呼よい物と書いて入れたる町といふをば引出しぬ、女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無き物なれ、小野の夫れならねどお町は美しい名と家内いさみて、町や、町や、と手から手へ渡りぬ。

七

お町は高笑ひするやうに成りて、時は新玉の春に成りぬ、お美尾は日々に安からぬ面もち、折には涙にくるゝ事もあるを、血の道の故と自身いへば、與四郎は左のみに物も疑はず、只この

子の成長ならん事をのみ語りて、例の洋服すがた美事ならぬ
 勤めに、手辨當さげて昨日も今日も出ぬ。
 お美尾の母は東京の住居も物うく、はした無き朝夕を送るに
 飽きたれば、一つはお前様がたの世話をも省くべき爲、つね／
 "御懇命うけましたる從三位の軍人様の、西の京に御榮轉
 の事ありて、お邸彼方へ建築られしを幸ひ、處の女中頭と
 して勤めは生涯のつもり、老らくをも養ふて給はるべき約
 束さだまりたれば、最う此地には居ませぬ、又來る事があらば
 一泊はさせて下され、その外の御厄介には成りませぬと言ふに、
 與四郎は左りとも一人の母親なれば、美尾が心細さも思ひ
 やりて、お前も御老年のこと、いかに勤めよきとても、他人場

の奉公といふ事させましては、子たる我々が申譯の言葉なし、是非に止まり給へと言へども、いや／＼其様の事はお前様出世の曉にいふて下され、今は聞ませぬとて孤身の風呂敷づゝみ、谷中の家は貸家の札はられて、舟路ゆたかに彼の地へと向ひぬ。

越えて一ト月、雲黒く月くらき夕べ、與四郎は居残りの調べ物ありて、家に歸りしは日くれの八時、例は薄くらき洋燈のもとにかざぐるま犬張子取ちらして、まだ母親の名も似合ぬ美尾が懐風車、小兒に添へ乳の美しくさま見るべきを、格子のおしくつろげ、外より伺ふに燈火ぼんやりとして障子に映るかげも無し、お美尾お美尾と呼ながら入るに、答へは隣の方に聞えて、今参りま

すと言ふ句は似たれど言葉は有らぬ人なりき。

となりつま隣の妻の入來るを見るに、懷には町を抱きたり、與四郎胸さわぎ

のして、美尾は何處へ參りました、此日暮れに燈火をつけ放しで、

かひもの買物にでも行きましたかと問へば、隣の妻は眉を寄せて、さあ

そのこと其事で御座んすとて、睡り覺めたる懷中の町がくすりくすり

と嘩泣るを、おゝ好い子好い子と、ゆすぶつて言葉絶えぬ。

あかりわたし燈火は私が唯今點けたので御座んす、誠は今までお留守居をし

て居ましたのなれど、家のやんちやが六ツかしやを言ふに小言い

ふとて明けました、御親造は今日の晝前、通りまで買物に行

つて來まする、歸りまで此子の世話をお頼みと仰しやつて、唯し

ばらくの事と思ひしに、二時になれども三時はうてども、音も無

くて今^{いま}まで影^{かげ}の見^みえられぬは、何^{どこ}處^こまで物^{もの}買^かひにお出^{いで}なされしや
 ら、留^る守^すたのまれまして日^ひの暮^くれし程^{ほど}心^{こゝろ}づかひな物^{もの}は無^なし、まあ
 何^どうなされたので御^ご座^ざんしよな、と問^とひかけられて、それは我^われ
 より尋^{たづ}ねたき思^{おも}ひ、平^ふ常^{だん}着^ぎのまゝで御^ご座^ざりましたかと問^とへば、は
 あ羽^は織^{をり}だけ替^かえて行^ゆかれたやうで御^ご座^ざんす、何^{なに}か持^もつて行^ゆました
 か、いゑ其^{その}やうには覺^{おぼ}えませぬと有^あるに、はてなと腕^{うで}の組^くまれて、
 此^{この}遅^{おそ}くまで何^{どこ}處^こにと覺^{おぼ}束^{つか}なし。
 無^ぶ器^ぎ用^{よう}なお前^{まへ}様^{さま}が此^{この}子^こいぢくる譯^{わけ}にも行^ゆくまじ、お歸^{かへ}りに成^な
 まで私^{わたし}が乳^{ちち}を^あげませうと、有^{あり}さまを見^みかねて、隣^{となり}の妻^{つま}の子^こを抱^だ
 いて行^ゆくに、何^{なに}分^{ぶん}お頼^{たの}み申^{まを}すと^し言^いひながら、美^み尾^をの行^{ゆく}衛^ゑに心^{こゝろ}
 を取^とられてお町^{まち}が事^{こと}はうはの空^{そら}に成^{なり}ぬ。

よもや、よもや、と思へども、晴れぬ不審は疑ひの雲に成りて、
 唯一ト棹の箆筒の引出しより、柳行李の低はかと無く調べて、
 もし其跡の見ゆるかと探ぐるに、塵一はしの置場も變らず、つ
 ね／＼寶のやうに大事がりて、身につく物の隨一好き成りし手
 づなぞめ綱染の帯あげも其まゝに有けり、いつも小遣ひの入れ場處なる
 鏡臺の引出しを明けて見るに、これは何とせし事ぞ手の切れ
 るやうな新紙幣をばかり、其數およそ二十も重ねて上に一通、
 よ四郎は見るより仰天の思ひに成りて、胸は大波の立つ如
 く、扱こそ子細は有けれと狂ふて、其文開けば唯一ト言、美尾
 は死にたる物に御座候、行衛をお求め下さるまじく、此金は町
 に乳の粉をとの願ひに御座候。

與四郎は忽ち顔の色青く赤く、唇を震はせて悪婆、と※びしが、
 怒氣心頭に起つて、身よりは黒烟りの立つ如く、紙幣も文も
 寸斷く裂いて捨て、直然と立しさま人見なば如何なりけん。

八

浮世の欲を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたとは、人に
 は赤鬼と仇名を負せられて、五十に足らぬ生涯のほどを死
 灰のやうに終りたる、それが餘波の幾万金、今の玉村恭助
 ぬしは、其與四郎が智なりけり。彼の人あれ程の身にて人の性
 をば名告らずともと誹りしも有けれど、心安う志す道に走つ

て、内うちを顧かみる疾やましさの無なきは、これ皆みな養父やうふが賜物たまものぞかし、さ
 れば奥方おくがたの町子まちこおのづから寵愛てうあいの手の平ひらに乗のつて、強あながち良人おつと
あなどを侮あなるとなけれども、舅姑しりぢとめおはしまして萬よろづ窮屈きうくつに堅かたくるしき
 嫁御よめごり寮りやうの身みと異ことなり、見みたしと思おもはゞ替かはり目毎めごとの芝居しば行きも誰た
 れかくげうは苦情まをすを申まをすべき、花見はなみ、月見つきみに旦那だんなさま催もよほし立たて、共ともに連つ
 らぬる袖そでを樂たのしみ、お歸かへりの遅おそき時ときは何處どこまでも電話でんわをかけて、
よる夜ふは更あまくるとも寐給ねたまはず、餘あまりに戀こひしう懷なつかしき折をりは自みづら少すこしは
はづ恥おもかしき思いひ、如何いかなる故ゆゑともしるに難かたけれど、且だんな那なさま在おほしま
ときさぬ時ときは心こころ細ほそさ堪たへがたう、兄あにとも親おやとも頼母たのもしき方かたに思おもは
 れぬ。

左さりながら折をりふし地方遊説ちほうゆうぜいなどゝて三月半年つきはんとしのお留守るすもあり、

たうちば
 湯治場あるきの夫れと異なれば、
 このとき
 此時には甘ゆる事もならで、
 たいたづ
 唯徒らの御文通、互ひの封のうち人には見せられぬ事多かるべ
 し。

このおんなか
 此御中に何とてお子の無き、相添ひて十年餘り、夢にも左様の
 けしき
 氣色はなくて、清水堂のお木偶さま幾度空しき願ひに成けん、
 だんな
 旦那さま淋しき餘りに貰ひ子せばやと仰しやるなれども、奥さま
 この
 の好み六づかしけれど、是れも御縁は無くて過ぎゆく、落葉の霜
 あさ
 の朝なく深くて、吹く風いとゞ身に寒く、時雨の宵は女子ども
 こたつ
 炬燵の間に集めて、浮世物がたりに小説のうわさ、ざれた
 をんな
 る婢女は輕口の落しばなしして、お氣に入る時は御褒賞の何や
 か
 彼や、人に物を遣り給ふ事は幼少よりの蕩樂にて、これを父

親おや二もなく憂うがりし、一ト口くちに言いはゞ機嫌きげんかちの質たちなりや、一
 ト言心こところに染そまる事ことのあれば跡あと先さきも無なく其そのもの者かわ可愛めしゆう、車夫しやふの
 茂助もすけが一人子ひとりこの與よ太郎たらうに、此新年このはるだんな旦めし那なさま召めしおろしの斜子なぐこの羽織はをり
 を遣つかはされしも深ふかくの理由わけは無なき事ことなり、假かり初そめの愚痴ぐちに新年着はるぎ
 の御座ござりませぬよし大方おほかたに申まをせしを、頓やがて憐あわれみての賜たまはり物もの、茂
 助すけは天地てんちに拜はいして、人ひとは鷹たかの羽はの定どう紋もんいたづらに目めをつけぬ、
 何なに事ごとも無なくて奥様おくさま、書生しよせいの千葉ちよばが寒さむかるべきを思おぼしやり、
 物縫ものぬひの仲なかといふに命いひ令つけて、仰おほせければ背そむくによし無なく、少すこし
 は投なげやりの氣味きみにて有ありし、飛白かすりの綿わた入れ羽織はをりときの間まに仕立したてさ
 せ、彼かの明あくる夜よは着きせ給たまふに、千葉ちよばは御恩ごをんのあたゝかく、口くちに數か
 々ずくのお禮れいは言いはねども、氣きの弱よわき男をとこなれば涙なみださへさしぐまれて、

なかはたら
 仲 働きの福に頼みてお禮しかるべくと言ひたるに、渡り者の
 口 車よく廻りて、斯様くしか／＼で、千葉は貴嬢泣いて
 居りますと言上すれば、お、可愛い男と奥様御鼻負の増り
 て、お心づけのほど今までよりはいとゞしう成りぬ。
 十一月の二十八日は旦那さまお誕生日なりければ、年毎お友
 達の方々招き參らせて、坐の周旋はそんじよ夫れ者の美
 くしきを撰りぬき、珍味佳肴に打とけの大愉快を盡させ給へば、
 髭むしやの鳥居さまが口から、逢ふた初手から可愛さがと恐れ入
 るやうな御詞をうかゞふのも、例の澤木さまが落人の梅川
 を遊して、お前の父さん孫いもんさむとお國元を顯はし給ふも
 皆この折の隠し藝なり、されば派手者の奥さま此日を晴れにして、

しんちよう 新調の三枚着に今歳の流行を知らしめ給ふ、世は冬なれど
 ようしゆん 陽春三月のおもかげ、落り過ぎたる紅葉に庭は淋しけれど、
 かき さざんかをり 垣の山茶花折しり顔に匂ひて、松の緑のこまやかに、酔ひすゝま
 ひと ぬ人なき日なりける。
 ことし 今歳は別きてお客様の數多く、午後三時よりとの招待状
 むな 一つも空しう成りしは無くて、暮れ過ぐるほどの賑ひは坐敷に溢
 ちやしつ すみのが れて茶室の隅へ逃るゝもあり、二階の手摺りに洋服のお軽
 よろう めがめ ちう 女郎、目鏡が中だと笑はるゝもありき、町子はいとゞ方々の持
 うるさ おく おく はやし五月蠅く、奥さん奥さんと御盃の雨の降るに、御免
 そ わたし よ いたゞ 遊ばせ、私は能う頂きませぬほどにと盃洗の水に流して、さ
 つつ のが りとも一盞二盞は逃れがたければ、いつしか耳の根あつう成りて、

胸の動悸のくるしう成るに、外づしては濟まねども人しらぬうち
 にと庭へ出で、池の石橋を渡つて築山の背後の、お稻荷さま
 が社前なるお賽銭箱へ假初に腰をかけぬ。

九

此家は町子が十二の歳、父の與四郎低當ながれに取りて、夫れ
 より修膳は加へたれども、水の流れ、山のたゞずまい、松の木
 がらし小高き聲も唯その昔のまゝ成けり、町子は酔ごゝち夢のご
 とく頭をかへして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前
 の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さ

びたるもみゆ、夜あらしさつと喜連格子に音づるれば、人なきに
 鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。
 町子は俄かに物のおそろしく、立あがつて二足三足、母屋の方へ
 歸らんと爲たりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は
 狢犬の臺石に寄かゝり、木の間もれ來る坐敷の騒ぎを遙かに
 聞いて、あゝあの聲は旦那様、三味線は小梅さうな、いつの間
 に彼のやうな意氣な洒落ものに成り給ひし、由斷のならぬと思ふ
 と共に、心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦
 るしさは、胸の中の何處とも無く沸き出ぬ。
 良久しうありて奥さま大方酔も覺めぬれば、萬におのが亂るゝ
 怪しき心を我れと叱りて、歸れば盃盤狼藉の有さま、人

々が迎ひの車門前に綺羅星とならびて、何某様お立ちの聲に

ぎはしく、散會の後は時雨に成りぬ。

恭助は太く疲れて禮服ぬぎも敢へず横に成るを、あれ貴郎お召

物だけはお替へ遊ばせ、夫れではいけませぬと羽織をぬがせて、

帯をも奥さま手づから解きて、糸織のなへたるにふらんねるを

重ねし寐間着の小袖めさせかへ、いざ御就蓐と手をとりにて助け

ば、何其様に酔ふては居ないと仰しやつて、滄浪ながら寐間

へと入給ふ。奥さま火のものと用心をと言ひ渡し、誰れも彼

れも寐よと仰しやつて、同じう寐間へは入給へど、何故となう

安からぬ思ひのありて、言はねども面持の唯ならぬを、旦那さ

ま半睡の目に御覽じて、何故寐ぬか、何を考へて居るぞと尋ね

給ふに、奥さま何とお返事の聞かせ参らする事もあらねど、唯
 々不思議な心地が致しまする、何う致したので御座りませう、
 私にも分りませぬと言へば、旦那さま笑つて、餘り心を遣ひ過ぎ
 た結果であらう、氣さへ落つければ直ぐ癒る筈と仰しやるに、
 否それでも私は言ふに言はれぬ淋しい心地がするので御座ります、
 餘り先刻みな様のお強い遊ばすが五月蠅さに、一人庭へと逃げ
 まして、お稻荷さまのお社の所で酔ひを覺まして居りましたに、
 私は變な變な、をかしい事を思ひよりまして、笑つて下さります
 な、何うも何とも言はれぬ氣持に成ました、貴郎には笑はれて、
 叱かられる様な事で御座りましたよと下を向いて在するに、見れば
 涙の露の玉、膝にこぼれて怪しう思はれぬ。

おく 奥さまは例に似合はず沈みに沈んで、わたしは貴君に捨てられは爲ぬか
 と存じまして、夫れで此様に淋しう思ひますると言ひ出れば、
 又かと旦那さま無造作に笑つて、誰れが何を言ふたか、一人で考
 へたか、其様なつまらぬ事の有る筈は無い、お前の思ふて呉れ
 るほど世間は我しを思ふて呉れぬから、まあ安心して居るが宜
 いと子細も無い事に言ひ捨つれば、夫れでも私は其やうな悋氣沙
 汰で申のでは御座りませぬ、今日の會席の賑かに、種々の
 方々御出の中に誰れとて世間に名の聞えぬも無く、此やうの
 お人達みな貴郎さまの御友達かと思ひますれば、嬉しき胸の
 中におさへがたく、蔭ながら拜んで居ても宜いほどの辱さなれど、
 つく／＼我が身の上を思ひまするに、貴郎はこれより彌ます／＼

\の御出世ごしゅつせを遊あそして、世よの中廣なかくろうなれば次第しだいに御器量ごきりようまし給たま
 ふ、今宵こよひこうめ小梅こめいが三味みに合あせて 勸進帳くわんじんちやうの一くさり、悵りんき氣きでは
 無なけれど彼かれほどの御修業ごしゆげうつみしも知らしらで、何時いつも昔むかしの貴郎あなた
 とおもひ、淺あさき心こころの底そこはかなと無なく知しられます内うち、御厭おいとはしさの
たねも交まるべし、限かぎりも知しれず廣ひろき世よに立たちては耳みみさへ目こさへ肥こえ
たまだうり、有あるかぎり 限かぎりだけの家いへの内うちに朝夕あさゆむ物ものおもひの苦くも知しらで、
 唯ただぼんやりと過すします身みの、遂つひには倦あかれまするやうに成なり
 て、悲かなしかるべき事こと今いまおもふても愁つらし、私わたくしは貴郎あなたのほかに頼母たのも
しき親おや兄弟きょうだいも無なし、有ありてから父ちちの與よ四郎しうざい在世せいのさまは知しり
たまごとく、私わたくしをば母は親おや似にの面おもざし見みるに肝かんの種たねとて寄よせつけも
いた致いたされず、朝夕あさゆふさびしうて暮くらしましたるを、嬉うれしき縁ことにて今いま斯かく

わたくわが私わたくわがが我わがまゝをも免ゆるし給たまひ、思おもふ事ことなき今日けふこの此頃ころ、それは勿もつ體たいな
 いほどの有あり難がたさも、萬もし一身みにそぐなはぬ事ことならばと案あんじられま
 して、此この事ことをおもふに今宵こよひの淋さびしき事こと、居いても起たちてもあら
 ぬほどの情なさけなさより、言いふてはならぬと存ぞんじましたれど、遂つひ此こ
 のやうのやうに申まうしあげ上しまひて仕舞しまひました、夫それは孰いづれも取とり止めとの無なき取とりこし
 苦く勞ろうで御座ござりませうけれど、何どうでも此このやうやうな氣きのするを何なにとし
 たら宜よう御座ござりますか、唯ただ々く心こゝろぼそう御座ござりますとて打うちなくに、
 旦那だんなさま愚痴ぐちの僻見ひがみの跡あと先さきなき事ことなるを思おぼしめし、召めし、悋氣りんきよりぞ
 と可を笑かしくも有あける。

われと我が身に持て脳みて奥さま不覺に打まどひぬ、此明くれ
 の空の色は、晴れたる時も曇れる如く、日の色身にしみて怪しき
 思ひあり、時雨ふる夜の風の音は人來て扉をたゞくに似て、淋し
 きまゝに琴取出し獨り好みの曲を奏でるに、我れと我が調哀れ
 に成りて、いかにするとも弾くに得堪えず、涙ふりこぼして押や
 りぬ。ある時は婦女どもに凝る肩をたゞかせて、心うかれる様な
 戀のはなしなどさせて聞くに、人は腮のはづるゝ可笑しさとして笑
 ひ轉ける様な埒のなきさへ、身には一々哀れにて、我れも思ひの
 燃ゆるに似たり、一夜仲働きの福こゑを改めて、言はねば人の知
 らぬ事、いふて私の徳にも成らぬを、無言にいられませぬは饒

舌べりの癖くせ、お聞ききになつても知らぬ顔かほに居いて下くださりませ、此處こゝに
 をかなしき一條どうの物ものがたりと少すこし乗地のりぢに聲こゑをはづますれば。夫それは
 何なにぞや。お聞きなされませ書生しよせいの千葉ちねが初戀はつこひの哀あはれ、國くにもとに
 居おりました時ときそと見初みめたが御座ござりましたさうな、田舎物いなかもの事こと
 なれば鎌かまを腰こしへさして藁草履わらぞうりで、手拭てぬぐひに草束くさたばねを包つんでと
 思おぼしめし召まませうが、中々なかく左様さやうでは御座ござりませぬ美うくしいにて、
 村そんちやう長いの妹いもといふやうな人ひとださうで御座ござります、小學校せうがくかうへ通かよ
 ふうちあちに淺あからず思おもひましてと言いへば、夫それは何方どちらからと小間使こまづか
 ひの米口よねぐちを出だすに、黙だまつてお聞き、無むろんちば無論むろんち千葉ちねさんの方ほうからさとある
 に、おやあぶの無骨ぶこつさんがとて笑わらひ出だすに、奥様おくさま苦に笑がひして可か
 憐わいさうに失しく敗じりの昔むかし話ばなしを探さぐり出だしたのかと仰おつしやれば、いゑ

なかくその 中々其やうに遠方の事ばかりでは御座りませぬ、未だ追々にと衣紋を突いて咳拂ひすれば、小間使ひ少し顔を赤くして似合頃の身の上、悪口の福が何を言ひ出すやらと尻目に眺めば、夫れに構はず唇を嘗めて、まあお聞遊ばせ、千葉が其子を見初ましてからの事、朝學校へ行ます時は必ず其家の窓下を過ぎて、聲がするか、最う行つたか、見たい、聞きたい、話したい、種々の事を思ふたと思し召せ、學校にては物も言ひましたろ、顔も見ましたろ、夫れだけでは面白う無うて心いられのするに、日曜の時は其家の前の川へ必らず釣をしに行きましたさうな、鮒やたなごは宜い迷惑な、釣るほどに釣るほどに、夕日が西へ落ちてても歸るが惜しく、其子出て來よ残り無くお魚を遣つて、喜ぶ

顔かほを見みたいとでも思おもふたので御座ござりましよ、あゝは見みえますれど
 彼あれで中なか々の苦勞くろう人にんといふに、夫それはまあ幾いく歳のとし其その戀こひ
 出で來きてかと奥おく様さまおつしやれば、當あて、御覽ごらんあそばせ先方むかうは村そんち
 長やうの妹いもと、此方こちらは水みづ計づめし上あるお百ひやく姓しやう、雲くもにかけ橋はしかずみ、霞あ
 に千鳥ちどりなど、奇麗きれ事ことでは間まに合あひませぬほどに、手短てみぢかに申まうさ
 うなら提燈てうちんに釣鐘つりがね、大分だいぶん其處そこに隔へだてが御座ござりまするけれど、
 戀こひに上じやう下の無ない物ものなれば、まあ出で來きたと思おぼしめしますか、お米よね
 どん何なんと、題だいを出だされて、何なにか言いはせて笑わらふつもりと惡わる推ずいをす
 れば、私わたしは知しらぬと横よこを向むく、奥おく様さま少すこし打笑うちわらひ、成なり立たたね
 ばこそ今日けふの身みである、其その様やうなが萬もしも一いちあるなら、あうの打うちかぶり
 の亂みだれ髪がみ、洒落しやれげ氣げなしでは居いられぬ筈はず、勉強べんきやう家かにしたは其その自やけ狂け

からのかと仰しやるに、中々もちまして彼男が貴嬢自狂など起す
 やうな男で御座りましよか、無常を悟つたので御座りますと言
 ふに、そんなら其子は亡くなつてか、可憐さうなと奥さま憐がり
 たまふ、福は得意に、此戀いふも言はぬも御座りませぬ、子供の
 事なれば心にばかり思ふて、表向きには何とも無い月日を大
 凡どの位送つた物で御座んすか、今の千葉が様子を御覽じても、
 彼れの子供の時ならばと大底にお合點が行ましよ、病氣して煩
 つて、お寺の物に成ましたを、其後何と思へばとて答へる物は松
 の風で、何うも仕方が無からうでは御座んせぬか、さて夫からが
 本文で御座んすとして笑ふに、福が能い加減なこしらへ言、似つ
 こらしい嘘を言ふと奥さま爪はじき遊ばせば、あれ何しに嘘を申

ませう、左りながらこれをお耳みみに入れたといふと少し私が困りの
 筋すぢ、これは當人たうじんの口から聞いたので御座りますと言へば、嘘うそを
 お言ひ、彼男あれが何うして其様そのやうな事を言はふ、よし有つてからが、
 苦にがい顔かほでおし黙だまつて居るべき筈はず、いよゝの嘘うそと仰おつしやれば、さ
 ても情なさけない事ことその様に私やうわたしの事を信仰しんかうして下くださりませぬは、昨日きのふ
 の朝あさ千葉ちばが私わたしを呼びよびまして、奥様おくさまが此この四五日にちお御ごすぐれ無い様やうに
 見上みあげられる、何どうぞ遊あそびしてかど如何いかにも心しんぱい配まをらしく申まをすの
 で、奥様おくさまはお血ちの故せいで折をりふし鬱ふさぎ症しようにもお成なり遊あそすし眞實しんじつお
 悪わるい時ときは暗くらい處ところで泣ないて居いらつしやるがお持もち前まへと言いふたらば、
 何どんなにか貴嬢あなた吃驚びっくり致いたしまして、飛とんでも無い事こと、それは大たい
 層うな神しん經けい質しつで、悪わるくすると取とりかへしの付つかぬ事ことになると申まをし

まして、夫れで其時申ました、私が郷里の幼な友達に是れ
 く斯う言ふ娘が有つて、肝もちの、はつきりとして、此邸の奥
 くさま様に何うも能く似て居た人で有つた、繼母で有つたので平常
 の我慢が大底ではなく、積つて病死した可憐な子と何れ彼の
 をとごことござ男の事で御座りますから、眞面目な顔でありくを言ひましたを、
 わたし私のはぎ合せて考へると今申た様な事に成るので御座ります、其
 のこに奥様が似ていらつしやると申たのは夫れは嘘では御座りま
 せぬけれど、露顯しますと彼男に私が叱られます、御存じないお
 つも積りでと舌を廻して、たゞき立る太鼓の音さりとはい賑はしう聞え
 わた渡りぬ。

十一

ことし今歳も今日十二月の十五日、世間おしつまりて人の往來大路に
 いそがはしく、お出人の町人お歳暮持参するものお勝手に賑
 々しく、急ぎたる家には餅つきのおとさへ聞ゆるに、此邸にて
 は煤取の笹の葉座敷にこぼれて、冷めし草履こゝかしこの廊下
 に散みだれ、お雑巾かけまする物、お疊たゝく物、家内の調度
 になひ廻るも有れば、お振舞の酒に酔ふて、これが荷物に成る
 もあり、御懇命うけまするお出入の人々、お手傳お手傳ひと
 て五月蠅きを半は断りて集まりし人だけに瓶のぞきの手ぬぐひ、
 それ、と切つて分け給へば、一同手に手に打冠り、姉さま唐茄

子、頬ほかふり、吉原よしはらかふりをするも有り、旦那だんなさま朝あさよりお留る
 守すにて、お指圖さしづし給たまふ奥おくさまの風ふうを見みれば、小褌こつまかた手てに友仙ゆふぜん
 の長襦ながじゆばん袴は下に長ながく、赤あかき鼻緒はなをの麻裏あさうらを召めして、あれよ、これよ
 と仰おほせらる、一しきり終おはりての午後ひるすぎ、お茶ちやぐわし山やまと擔かつぎ込こめば
 大皿おほさらの鐵砲てつぽうまき分捕ぶんどり次第しだいと沙汰さたありて、奥様おくさまは暫時しばしのほ
 ど二階かいの小間こまに氣きづかれを休やすめ給たまふ、血ちの道みちのつよき人ひとなれば胸むな
 ぐるしき堪たえがたうて、枕まくらに小抱卷こがいまき仮初かりそめにふし給たまひしを、小
 間まづかひの米よねよりほか、絶たえて知しる者ものあらざりき。
 奥おくさまとろくとしてお目覺めさむれば、枕まくらもとの縁えんがはに男女なんによの話はな
 し聲こゑさのみ憚はゞかる景色けしきも無なく、此宿こゝの旦だん的つくの、奥洲おくしうのと、車く
 宿るまやどの二階かいで言いふやうなるは、奥おくさま此處こゝにと夢ゆめにも人ひとは思おもは

ぬなるべし。

かた／＼なかはたらきかく
 一方は仲働の福のこゑ、町寧に町寧にと仰しやるけれど、
 一日業に何うして左様は行渡らりよう、隅々隈々やつ
 て居てお溜りが有らうかえ、目に立つ處をざつと働いて、あとは
 何れも野となれさ、夫れで丁度能い加※に疲れて仕舞、そんなに
 お前正直で務る物かと嘲笑ふやうに言へば、大きにさとい
 ふ、相手は茂助がもとの安五郎がこゑなり、正直といえば此
 處の且的が一件物、飯田町のお波が事を知つてかと問ひかける
 に、お福は百年も前からと言はぬばかりにして、夫れを御存じの
 無いは此處の奥様お一方、知らぬは亭主の反對だね、まだ私
 は見た事は無いが、色の淺黒い面長で、品が好いといふでは

無いなか、お前まへは親方おやかたの代りかわにお供ともを申まをすこともある、拜おがんだ事こと
 が有あるかと問とへば、見みた段だんか格子戸かうしどに鈴すずの音おとがすると坊ぼつちやんが
 先さき立だちで驅かけ出だして來くる、續つづいて顯あらはれるが例れい物ぶつさ、髮かみの毛け自じ
 慢まんの櫛くし巻まきで、薄うす化げ粧しようのあつさり物もの、半はん襟ゑりつきの前まへだれ掛がけと
 くだけて、おや貴郎あなたと言いふだらうでは無ないか、すると此處こゝのがで
 れりと御座ござつて、久ひさしう無沙汰ぶさたをした、免ゆるるせ、かなんかで、入い
 りりぐち口くちの敷居しきゐに腰こしをかける、例れいのが驅かけ下おりて靴くつをぬがせる、見みと
 も無ないほど睦むつましいと言いふは彼あれの事こと、旦那だんなが奥おくへ通とほると小戻こもとり
 して、お供ともさん御苦勞ごくらう、これこゝで烟草たばこでも買かつてと言いつて、夫それ鼻は
 なぐすり藥なぐすりの出でる次第しだいさ、あれあれがお前まへ素人しろうとだから感かん心しんだと賞ほめる
 に、素人しろうとも素人しろうと、生無垢きむくの娘むすめあがりだと言いふでは無ないか、旦だ

那んなとは十何なんねん年なかの中で、坊ぼつちやんが歳としもことしは十歳とをか十一には
 成ならう、都合つがうの悪わるいは此處こゝの家うちには一人ひとりも子こ寶だからが無なうて、彼方あちら
 に立派りつぱの男をとこの子こといふ物ものだから、行ゆく々くを考かんへるとお氣きの毒どくなは
 此處こゝの奥おくさま、何どうも是これも授さづり物かものだからと一人ひとりが言いふに、仕方しかた
 が無いな、十分ぶせん先おほだんなの大旦那おほだんながしぼり取とつた身しんじよう上ひとだから、人ひと
 物ものに成なると言いつても理屈りくつは有あるまい、だけれどお前まい、不正直ふしやうぢきは
 此處こゝの旦那だんなで有あらうと言いふに、男をとこは皆みなあんな物もの、氣きが多いおほからと
 お福ふくの笑わらひ出だすに、悪わるく當あてつ擦こすりなさる、耳みみが痛いたいでは無いなか、
 お己おれは斯かう見みえても不義理ふぎりと土用干どようぼしは仕した事ことの無いな人間にんげんだ、
 女にようぼう房ぼうをだまくらかして妾めかけと處ところへ注つぎ込こむ様やうな不人ふにん情じやうは仕度したく
 ても出で来きない、あれ丈腹ただはらの太ふとい豪ゑらいのでは有あらうが、考かんへると此こ

處ゝの旦那だんなも鬼おにの性せうさ、二代だいつゞきて彌いよ々根ねが張はらうと、聞きくひと
 なげに遠慮ゑんりよなき高聲たかごゑ、福ふくも相槌あひづち例れいの調子てうしに、もう一は働たらき
 やつて除のけよう、安やすさんは下廻したまはりを頼たのみます、私わたしはも一度ど此處こゝ
 を拭ふいて、今度こんどはお藏くらだとして、雑巾ぞうきんがけしつくと始はめれば、
 奥おくさまは唯ただこの隔へだてを命いのちにして、明あけずに去いねかし、顔かほみらるゝ
 事こと愁とうらやと思おぼしぬ。

十二

十六日にちの朝あさぼらけ昨日きのふの掃除そうぢのあと清きよき、納戸なんどめきたる六疊でうの間ま
 に、置炬燵おきこたつして旦那だんなさま奥おくさま差向さむかひ、今朝けさの新聞しんぶんおし開ひら

きつゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなから
 ず、他處目うら山しう見えて、面白げ成しが、旦那さま好き頃
 と見はからひの御積りなるべく、年來足らぬ事なき家に子の無
 きをばかり口惜しく、其方に有らば重疊の喜びなれど萬一
 よく出来ぬ物ならば、今より貰うて心に任せし教育をした
 らばと是れを明くれ心がくれども、未だに良きも見當らず、年た
 てば我れも初老の四十の坂、じみなる事を言ふやうなれども家
 の根つぎの極まらざるは何かにつけて心細く、此ほど中の其方の
 やうに、淋しい淋しいの言ひづめも爲では有られぬやうな事ある
 べし、幸ひ海軍の鳥居が知人の子に素性も悪るからで利發に生
 れつきたる男の子あるよし、其方に異存なければ其れを貰ふて丹

精んせいしたらばと思おもはるゝ、悉しつかい皆ひきうの引受とりあけは鳥居とりあがして、里さとかた
 にも彼あの家いえにて成なるよし、年としは十一、容きりよう貌ようはよいさうなと言いふ
 に、奥おくさま顔かほをあけて旦那だんなの面おも様やういかにと覗うかがひしが、成なる程ほどそ
 れは宜よい思おほし召めしより、私わたしにかれこれは御座ござりませぬ、宜よいと覺おほし
 めさばお取極とりきめ下くださりませ、此家こゝは貴郎あなたのお家うちで御座ござりまする物もの、
 何なんとなり思おほしめしのまゝにと安やすらかに言いひながら、萬もし一しその子こ
 にて有ありたらばと無情つれなきおもひ、おのづから顔かほ色いろに顯あらはるれば、
 何なに取とりいそぐ事ことでも無ない、よく思案しあんして氣きに叶かなふたらば其時そのときの
 事こと、あまり氣きを鬱うつ々つとして病氣びようきでもしては成ならんから、少すこしは
 慰なぐさめにもと思おもふたのなれど、夫それも餘あまり輕けい卒そつの事こと、人形にんげうや雛ひなで
 は無なし、人ひと一人ひとり翫もてあそ弄び物ものにする譯わけには行ゆくまじ、出で來きそこねたと

塵塚ちりづかの隅すみへ捨てられぬ、家の礎いゑいしづゑもらに貰もらふのなれば、今いま一應聞をきき
 定めだもし、取調とりしらべても見た上みの事こと、唯ただこの頃ころの様に鬱ふさいで居
 たら身からだ體ための爲なに成なるまいと思おもはれる、これは急いそがぬ事こととして、ち
 と寄席よせきゝにでも行いつたら何どうか、播摩はりまが近ちかい處ところへかゝつて居いる、
 今夜こんやは何どうであらう行いかんかなと機嫌きげんを取り給たまふに、貴郎あなたは何故なぜ
 そんな優やさしらしい事ことを仰おつしやります、私わたしは決けつして其そのやうな事ことは伺
 したいと思おもひませぬ、鬱ふさぐ時ときは鬱ふさがせて置おいて下くだされ、笑わらふ時ときは
 笑わらひますから、心任こころまかせにして置おいて下くだされと、言いひて流石打さすがうち
 つけには恨うらみも言いひ敢あへず、心こころに籠こめて愁うれはしけの體ていにてあるを、
 おつと良人あきは淺あからず氣きにかけて、何故なぜその様やうな捨すてばるは言いふぞ、此
 のあひだ間まから何なにかと奥齒おくばに物ものの挟はさまりて一々心こころにかゝる事こと多おほし、人ひと

には取違へもある物、何をか下心に含んで隠しだてゝは無
 いか、此間の小梅の事、あれでは無いかな、夫れならば大
 間違ひの上なし、何の氣も無い事だに心配は無用、小梅は八木
 田が年來の持物で、人には指をもさゝしはせぬ、ことには彼
 の瘦せがれ、花は疾くに散つて紫蘇葉につゝまれようと言ふ物だ
 に、何れほどの物好きなれば手出しを仕様ぞ、邪推も大底に
 して置いて呉れ、あの事ならば清淨無垢、潔白な者だと微
 笑を含んで口髭を捻らせ給ふ。飯田町の格子戸は音にも知ら
 じと思召、是れが備へは立てもせず、防禦の策は取らざり
 き。

十三

さま／＼^もの物をおもひ給へば、奥様時々お癩の起る癖つきて、
 はげしき時は仰向に仆れて、今にも絶え入るばかりの苦しき、
 始めひかちうしやはじめ皮下注射など醫者の手をも待ちけれど、日毎夜毎に度かさな
 れば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす事なり、
 男ならでは甲斐のなきに、其事あれば夜といはず夜中と言はず、
 やがて千葉をば呼立て、反かへる背を押へさするに、無骨一遍
 律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしき、しのびやかの呻
 き頓て無沙汰に成るぞかし、隠れの方の六疊をば人奥様の癩部
 屋と名付けて、亂行あさましきやうに取なせば、見る目がか

や此間の事のいぶかしう、更に霜夜の御憐れみ、羽織の事さへ
 取添へて、仰々しくも成ぬるかな、あとなき風も騒ぐ世に忍
 ぶが原の虫の聲、露ほどの事あらはれて、奥様いとゞ憂き身に
 成りぬ。
 なかはたら 働きの福かねてあらく、心組みの、奥様お着下しの本
 中 結城、あれこそは我が物の頼み空しう、いろく千葉の厄介
 なりに成たればとて、これを新年着に仕立て、遣はされし、其恨み骨
 つずい 髓に徹りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を
 と 捉らへて珍事唯今出来の顔つきに、例の口車くるくくとや
 れば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん、
 いっしか恭助ぬしが耳に入れば、安からぬ事に胸さわがれぬ、家

つきならずは施すほどこべき道みちもあれども、浮世うきよの聞えきこ、これを別居べつきよ
 と引離ひきはなつこと、如何いかにもしのびぬ思おもひあり、さりとして此このまゝさ
 し置おかんんに、内政ないせいのみだれ世よの攻撃こうげきの種たねに成なりて、浅あさからぬ
 難義なんぎげんざい現在げんざいの身みの上うへにかゝれば、いかさまに爲せばやと持もてなやみ
 ぬ、我わがまゝも其そのまゝ、氣隨きずいも其そのまゝ、何なにかはことごとして咎とがめだ
 てなどなさんやは、金村かなむらが妻つまと立たちて、世よに耻はづかしき事ことなから
 ずはと覺おぼせども、さし置おきがたき沙汰さたとにかくかしまに暄かしましく、親したしき友とも
 など打うちつれての勸告くわんこくに、今日けふは今日けふはと思おもひ立たちながら、猶なほ
 そのことおよおよびして過すぎ行く、年とし立たかへる朝あしたより、松まつの内過うちすぎな
 其事そのことに及およばずして過すぎ行く、年とし立たかへる朝あしたより、松まつの内過うちすぎな
 ばと思おもひ、松まつとり捨すつれば十五いちご日にちばかりの程ほどにはとおもふ、二十はつ
 日かも過すぎて一月げつ空むなしく、二月くわつは梅うめにも心こゝろの急いそがれず、來くる月つきは小し

ようがくかう 學校の定期試験とて飯田町のかたに、笑みかたまけて急ぎ
 あ 合へるを、見れども心は樂しからず、家のさま、町子の上、いか
 はかり さまにせん、と斗おもふ、谷中に知人の家を買ひて、調度萬端
 おも おさめさせ、此處へと思ふに町子が生涯あはれなる事いふはかり
 あんるい なく、暗涙にくれては我が身が不徳を思しゝる筋なきにあらね
 おも ども、今はと思ひ斷ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる
 むね 夜、別居の旨をいひ渡しぬ。
 ちば かねてぞ千葉は放たれぬ。汨羅の屈原ならざれば、恨みは何と
 おほかは かのつべき、大川の水清からぬ名を負ひて、永代よりの汽船
 きこずがた に乗込みの歸國姿、まさしう見たりと言ふ物ありし。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

憂^うかりしはその夜^よのさまなり、車^{くるま}の用意^{ようい}何^{なに}くれと調^{ととの}へさせて後^{のち}、
 いふべき事^{こと}あり此方^{こなた}へと良人^{をつと}のいふに、今^{いま}さら恐^{おそ}ろしうて書^{しよ}齋^{さい}
 の外^とにいたれば、今宵^{こよひ}より其方^{そなた}は谷中^{やなか}へ移^{うつ}るべきぞ、此家^{このいえ}をば家^{いえ}
 とおもふべからず、立^{たち}歸^{かへ}らるゝ物^{もの}と思^{おも}ふな、罪^{つみ}はおのづから知^し
 りたるべし、はや立^たて、とあるに、夫^それは餘^{あま}りのお言葉^{ことば}、我^{われ}に惡^{わる}
 き事^{こと}あらば何^{なに}とて小言^{こごと}は言^いひ給^{たま}はぬ、出^だしぬけの仰^{おほ}せは聞^きませぬ
 とて泣^なくを、恭助^{けうすけ}振向^{ぶりむ}いて見^みんともせず、理^{わけ}由^ゆあればこそ、人^{ひと}
 並^みならぬ事^{こと}ともなせ、一々の罪^{ざい}状^{じやう}いひ立^たんは憂^うかるべし、

くるまようい
 車の用意もなしてあり、唯のり移るばかりと言ひて、つと立ちて
 へ部の外へ出給ふを、追ひすがりて袖をとれば、放さぬか不
 埒者と振切るを、お前様どうでも左様なさるので御座んする
 か、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私は一人もの、世
 には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、
 美事すて、此家を君の物にし給ふお氣か、取りて見給へ、我れを
 ば捨て、御覽ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨むを、
 突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。

完

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部 第二卷第六編」博文館

1896（明治29）年5月10日

初出：「文藝俱樂部 第二卷第六編」博文館

1896（明治29）年5月10日

※初出時の署名は、「樋口一葉女」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「母」と「母」、「加減」と「加※[#「マ+咸」、U+51CF
「」、「鬱」と「鬱」、「手傳《てつだ》ひ」と「手傳《てつだ
ひ》」の混在は、底本通りです。

※「與四郎」の「與」に対するルビの「よ」と「よし」、「男」に対するルビの「をとこ」と「おとこ」、「女房」に対するルビの「にようぼ」と「にようぼう」、「可愛さ」に対するルビの「かわいい」と「かはゆ」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2019年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

われから

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>